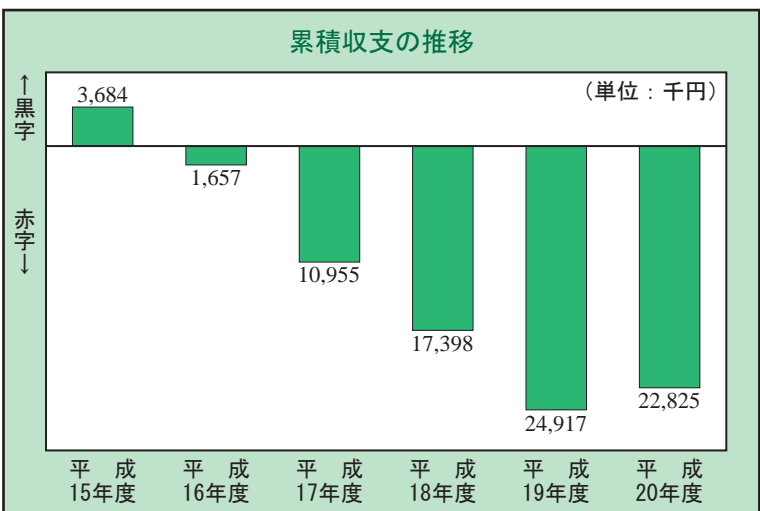
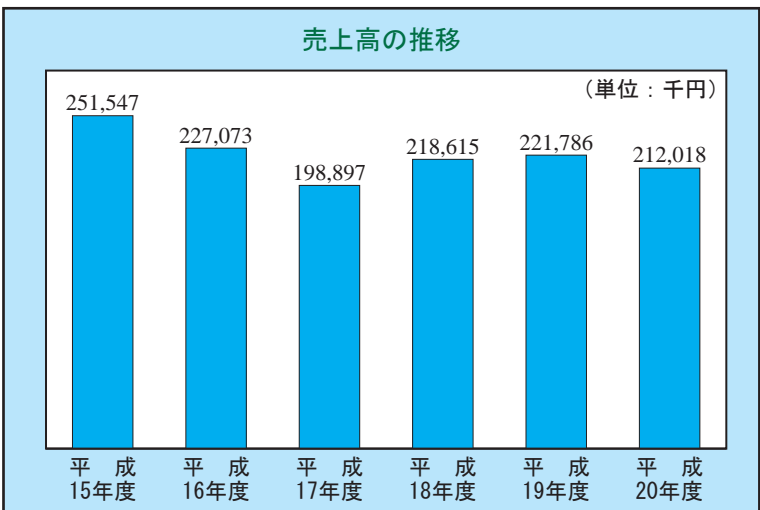




経営安定化の取り組み

(株)厚岸味覚ターミナルの運営における収支は、その運営形態の性格上、経済等の社会的要因の影響を受けやすいものであり、現在の経済動向等からは利用客の大きな入り込み増加は望めず、このままではさらに累積赤字が増加して経営破綻になることも懸念されます。

経営収支において、観光客が急減する冬期間でのマイナスを観光シーズンの収益で補いきれない状態になっており、民間企業ベースで議論を行うのであれば、原価率を下げるなどにより利益率を高め、また、閑散期にクローズするなど収益性の追及を優先すべきとの考え方もあります。



月別売上高の状況 (過去3年間の平均)

(単位：千円)

4月	11,363
5月	23,986
6月	18,656
7月	23,126
8月	34,185
9月	31,398
10月	26,017
11月	15,193
12月	8,546
1月	9,441
2月	6,840
3月	8,721



しかし、コンキリエの運営コンセプトは、地場資源の消費拡大と有効活用による町内産業の活性化であり、この施設の有存在によって、地元産品の消費拡大とブランド化が進み生産量も確実に伸びています。また、厚岸観光の中核拠点としての機能を発揮しており、町外へのアピール度も高く評価されています。

厚岸町および周辺観光圏域へ波及する影響を考慮すると、通年営業を継続して、道の駅としての機能を維持することが地域観光の振興において不可欠であり、このような公益性・公益性を持つて今後も営業を継続していくためには、冬期間における不採算部分に一定の支援をしなければならぬものと判断されます。

このため、平成12年度まで行われていた補助支援の考え方を基に、平成20年度から再び支援を行うことにしたものです。なお、この補助金については、閑散期となる11月から3月までの経費の25%相当として算定しました。また、平成21年度は委託料として追加しますが、これは、(株)厚岸味覚ターミナルの当初経営計画および収支予算計画に反映させることにより、収支バランスのとれた営業展開を促すためです。

(株)厚岸味覚ターミナルの経営状況

6月8日、(株)厚岸味覚ターミナルの株主総会が開かれ、平成20年度決算が示されました。当期純利益は二百九万一千九百六十八円でしたが、これは町からの補助金一千万円が加わった結果であり、実質的には七百九十万八千三百二十二円の単年度赤字が生じたこととなります。

この赤字の理由としては、近年、釧路管内への観光客が低迷を続けている中、昨年のガソリンや生活物資の高騰、世界的な経済不況による旅行控えが重なったことが要因と考えられ、前年度と比較すると入館者数は6・4割の減、売り上げで4・4割減少しており、人件費を含めた営業経費の削減を図ったものの厳しい結果となりました。

(株)厚岸味覚ターミナルは、開業時から大きな赤字経営に陥り、町議会等においても計画の甘さを強く指摘されてきました。この問題に対処すべく、町議会では『第三セクター調査特別委員会』が設けられ、経営の安定化に向けた議論の末、冬期運営支援の補助金支出が導き出された経過があります。経営においても、人件費の削減を柱とする経費抑制および売上増を図る経営改善策に取り組み、平成12年度まで継続された補助金支援と相まって、平成13年度には累積赤字を解消し、その後、平成15年度までは黒字が続いていました。しかし、その後の管内観光客の低迷により、平成16年度から売り上げが大きく減少し再び赤字化しており、平成19年度末で約二千四百九十万円の累積赤字を生じる状況になっています。

経営改善への取り組み

コンキリエの運営を安定的に継続するためには、更なる経営改善の取り組みは欠かせません。平成21年度の営業計画では、物産展など収益性と宣伝効果の高い催事への参加を増やし、また、積極的なセールス活動によって集客を促進するほか、レストランでの新メニュー提供など販売促進を図ります。また、仕入れの原価率改善や人件費の抑制などの経費削減をさらに進めながら、従業員のスキルアップによる現場体制の強化を目指します。

しかし、現在の厳しい社会経済動向は、依然として回復の兆しが見えない状況にあり、このような中で収益性をより高める効果的な経営改善を図ることは容易ではありません。

困難な時代を生き抜くための抜本的な経営改革への道を見いだすため、町内外の民間経営関係者等の協力を得て第三者による検討会を設け、これまでの運営方針や営業形態を見直す取り組みを進める考えです。

●コンキリエの経営状況等に関する問い合わせ／まちづくり推進課観光係 ☎内線 240